

国際美術展 TOKYO ATLAS International Art Exhibition

プレスリリース
2026年3月3日

目次

1 開催に寄せて	P2
2 アーティスティック・ディレクター	P3
3 主な会場とアーティスト紹介(一部)	P4-7
台場公園・お台場海浜公園	P4
テレコムセンタービル・アイルシながわ	P5
青海南ふ頭公園	P6
地下駐車場(青海南ふ頭公園内)	P7
4 関連プログラム	P8
5 開催概要	P9

1 開催に寄せて

国際美術展「TOKYO ATLAS」は、国際的な文化の潮流が交錯する都市、東京ならではのアートを媒介とした多様な価値観との出会いや交流が生まれるプラットフォームの創出を目指して開催されます。会場となる臨海部は、文字通り、海に向けて開かれた国際都市を象徴する地域であり、本美術展の意図にふさわしい環境を有していると言えるでしょう。

この美術展の特色は、多彩なアートプロジェクトを美術館などの専用施設に囲い込むのではなく、あえて日常的な市民生活が営まれている都市空間の中に挿入し、街の光景と一体化させることにあります。

タイトルの「ATLAS」とは世界を支える神話的存在であるアトラスに由来し、同時に地図帳を意味しています。私たちは街中に設置された作品を巡り歩くことで、まさに未知の地図をたどるかのように、わくわくした出会いを重ねることになるでしょう。それは東京という街の魅力を新鮮な眼差しで再発見することでもあるはずです。

たとえば、主たる会場の一つ、台場公園は幕末に黒船を迎え撃つ砲台として築かれながらも、結果的には一発の砲弾も放つことなく開国を迎えたというエピソードが伝わる人工島です。近代の幕開けを告げるこの史跡としての公園に配置される作品群は、歴史と先端的なアートが出会う不可思議な景観を出現させるに違いありません。

もう一つの主要なエリアである青海南ふ頭公園エリアは、コンテナ埠頭に隣接し、東京国際クルーズターミナルなど東京港の国際的な海運を見渡すことができる場所です。屋外と地下空間に展開されるさまざまな作品やプロジェクトを通して、独自の視点で都市の風景やインフラ、場所性などについて考察する機会となるでしょう。

既存の都市空間へのこうした挑戦は、国際的なアートシーンの第一線に立つアーティストたちの想像力の豊かさや多様な価値観に触れる喜びを観客へもたらすと同時に、東京という都市が秘めている意外な側面、あえて言うならば野生的なバイタリティに目を向けさせてくれることになるかもしれません。

本美術展には東京都が支援してきた若い世代のアーティストたちの作品を紹介する部門も設けられています。都市環境の中で開催されるこの企画が、未来に向けて好奇心を醸成し、新たな「ATLAS」を描いていくことを願います。

東京国際文化芸術祭実行委員会、TOKYO ATLAS アーティスティック・ディレクター 建畠 哲・三木あき子



2 アーティスティック・ディレクター



Photo | KITAJIMA Akira

建島 哲 | TATEHATA Akira (写真左)

美術評論家、詩人／草間彌生美術館長、京都芸術センター館長、川口市立美術館長
京都市立芸術大学および多摩美術大学名誉教授

国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長、コロンビア大学訪問研究員などを歴任。美術館と大学で現代美術の展覧会企画や教育研究に携わるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー(1990、1993)、横浜トリエンナーレ(2001)、あいちトリエンナーレ(2010)、東アジア文化都市京都「アジア回廊」展(2017)など国際美術展の芸術監督を務めてきた。受賞歴はオーストラリア国家栄誉賞、文化庁創立50周年記念表彰、京都市文化功労者。詩人としては、歷程新鋭賞、高見順賞、萩原朔太郎賞を受賞している。

三木あき子 | MIKI Akiko (写真右)

キュレーター／直島新美術館長、ベネッセアートサイト直島インターナショナル・
アーティスティック・ディレクター

パレ・ド・トーキョー(パリ、フランス)の創設メンバーとして2000年から2014年までチーフ&シニア・キュレーターを務めるとともに、台北ビエンナーレ(1998)、ヨコハマトリエンナーレ2011アーティスティック・ディレクター、同2017コ・ディレクター、バンコク・アート・ビエンナーレ(2024)など国際現代美術展の芸術監督やキュレーターを歴任。また、バービカン・アート・ギャラリー(ロンドン)、台北市立美術館、韓国国立現代美術館、森美術館、横浜美術館、京都市京セラ美術館、弘前れんが倉庫美術館にて、数々の展覧会のゲスト・キュレーターも担う。『Insular Insight』(Lars Müller、2011、ドイツ建築博物館建築本賞)など共著・共編も多い。

台場公園・お台場海浜公園 | DAIBA PARK / ODAIBA MARINE PARK

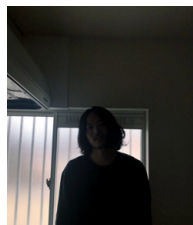
幕末期に黒船を迎え撃つ砲台として築かれた台場は、一発の砲弾も放つことなく開国を迎えた歴史を持つ人工の島です。その跡地が公園となった本会場は、草地や灌木の中に史跡が点在するという野趣に溢れた空間で、自然と歴史とが共存する独特の雰囲気が醸し出されています。一方、接続するお台場海浜公園は人工の砂浜で、台場公園とは対照的に海へ向けて広がる大らかな景観のダイナミズムを有しています。

これらの地区では、草間彌生による《ナルシスの庭》(1966/2026)や趙要による《精緻紅RGB (I&II)》(2022-2025)、石毛健太による音響インスタレーション作品などの環境を生かした作品が配置されます。鑑賞者は散策し、立ち止まり、振り返ることで、美術館などとは異なった作品と場との関係そのものを体験することになるでしょう。それは東京という都市の魅力の再発見の機会ともなるに違いありません。

石毛健太 | ISHIGE Kenta

1994年神奈川県生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。美術家、エキシビションメーカーとして、絵画、インスタレーション、プロジェクト型の作品など多様な表現を横断しながら、都市や日常の風景、知覚と物語の関係を探索制作を行っている。現場と関係を結ぶ実践的なプロジェクトや、作品と鑑賞者の偶発的な出会いを組み込む構造的アプローチが特徴である。

近年の主な展覧会に、個展「ニューグラウンド」(The 5th Floor, 東京、2021)、個展「アイオン」(BIYONG POINT, 秋田、2020)、「感性の遊び場」(ANB Tokyo, 東京、2022)などがある。

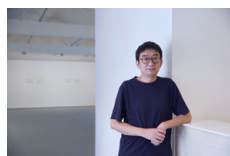


作品 | 《ただの水ではない》2019、
「生きられた庭」(京都府立植物園、京都、2019)
での展示風景

趙要(ジャオ・ヤオ) | ZHAO Yao

1981年四川省(中国)生まれ、北京(中国)在住。絵画、インスタレーション、写真、映像、パフォーマンスといった多様な表現を横断しながら、認識論や知覚、日常性、制度的な枠組みなどに鋭く切り込む独自の視点で制作している。日常の経験と芸術的経験との架け橋を築き、知覚と意味の生成を問う作品は、観る者に慣れ親しんだものを再考させる知覚的・概念的な体験をもたらす。

近年の主な展覧会に、「タイランド・ピエンナーレ」(ブーケット、タイ、2025)、個展「まあ普通、でも…」(オオタファインアーツ東京 7CHOME、東京、2025)、個展「Signals from Heaven, Signals from Heaven」(北京公社、北京、中国、2018)、個展「A Painting of Thought」(Pace Gallery、香港、2015)などがある。



作品 | 《Something in the Air》2019,
© Zhao Yao, Courtesy of Ota Fine Arts



台場公園

1928年7月7日開園、面積29,963.40㎡。ペリー来航を機に、外国の脅威から江戸を守るために幕府が砲台として築造した。現存する二つの台場のうち「第三台場」が都立公園となり、陣屋や火薬庫の跡など、貴重な江戸時代からの史跡も残る。



お台場海浜公園

1975年12月1日開園。面積510,809.79㎡(うち水域435,395.00㎡)。対岸に高層ビル群を臨み、海を公園の一部とする都市型海浜空間。全長約800mの人工砂浜「おだibaビーチ」からはレインボーブリッジや夕景・夜景を一望できる。

※掲載作家は一部抜粋(2026年3月3日現在)

テレコムセンタービル | TELECOM CENTER BUILDING

青海エリアを象徴し、大規模なスケールを有する本ビルの中にあるアトリウムに、草間彌生による2つのバルーン作品、《ヤヨイちゃん》(2012/2023)と、日本初公開となる《宇宙へ行って見た愛の花束》(2021)を展示します。この2作品を組み合わせる展示の試みは、世界初です。《ヤヨイちゃん》が作家自身の分身として「内なる宇宙」を象徴する存在であるのに対し、《宇宙へ行って見た愛の花束》は、生命と愛が無限に広がっていく「外なる宇宙」のイメージを体現しています。両作が出会うことで、内と外、個と宇宙が対話する場が立ち上がります。

柔らかなバルーン素材は硬質な建築空間と呼应し、アトリウム全体を包み込む祝祭的な空間を生み出します。来場者は上下階を移動しながら多様な視点で作品を体験でき、昼夜によって異なる表情を見せる空間は、幻想的な“草間彌生の宇宙”として強い印象を残すでしょう。

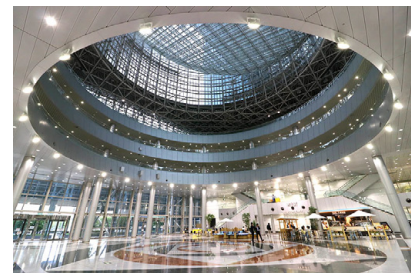
草間彌生 | KUSAMA Yayoi

1929年長野県松本市生まれ。幼少期から幻視・幻聴を体験し、網目模様や水玉をモチーフにした絵画を制作し始める。1957年に渡米、ネット・ペインティング、ソフト・スカルプチュア、鏡や電飾を使ったインスタレーションやハプニングなど多様な活動を展開し、ニューヨークのアートシーンを牽引するアーティストとして注目を浴びた。70年代半ばに帰国。単一モチーフの強迫的な反復と増殖による自己消滅という独自の世界は、90年代に入って改めて高く評価されるようになり、近年は巨大なバルーンを浮遊させたインスタレーションでも知られる。

これまで1998年にニューヨーク近代美術館など国内外の主要美術館で回顧展が開催されるほか、現在も大規模個展「Yayoi Kusama」がヨーロッパ3カ国を巡回中。東京には2017年に草間彌生美術館が設立され、作家自身の構想に基づき、その表現と思想を継続的に発信している。



作品 | 《宇宙へ行って見た愛の花束》2021、
「Yayoi Kusama: A Retrospective」
(グロピウス・バウ、ベルリン、ドイツ、2021)での
展示風景、© YAYOI KUSAMA, Courtesy of
Ota Fine Arts



テレコムセンタービル
1996年2月開業、面積158,050.18㎡。全面ガラスウォールが
印象的な臨海副都心のランドマーク的存在であり、高い安全
性と快適な職場環境を提供するビル。高さ37m、5層吹き抜け
の大規模なアトリウムを有する。*写真はアトリウム

アイルしながわ | ISLE SHINAGAWA

かつて都市のごみ集積場として使われていた本施設は、再開発によって周辺の水辺沿いの広場や遊歩道が整備され、歴史の記憶を内包した都市空間として生まれ変わっています。人工的な構造物と開かれた水面、かつての用途の名残が混ざり合うこの場所では、笹岡由梨子による映像インスタレーションなどが展示される予定です。

笹岡由梨子 | SASAOKA Yuriko

1988年大阪府生まれ、現在、関西と香港を拠点に活動。自らが主演する操り人形芝居仕立ての大規模な映像インスタレーション作品で知られるが、その手作り感のあるユーモラスなイメージとストーリーは、愛や家族といったアンチチームなテーマなどに想を得つつも、時にいざさか辛辣であり不穏でもある文化的な省察や批評性を宿している。また、中東欧に長期間滞在し、自ら作詞作曲した壮大な民族叙事詩ともいべき作品を制作するという発想のスケールの大きさも注目される。

近年の主な展覧会に、個展「笹岡由梨子のパラダイス・ダンジョン」(滋賀県立美術館、滋賀、2026)、個展「ボロニア×キュリー・マジック・ラボ 移動のカー」(大阪市中央公会堂、大阪、2025)、個展「Yuriko Sasaoka: Animale」(PHD Group、香港、2025)、個展「Zniknij Z Ziemi」(Trafostacja、シュチェチン、ポーランド、2021)などがある。



作品 | 《タイムズ》2026 Photo by 夢生田兵吾
ポートレート | Photo by S.C.Felix Wong



アイルしながわ
2022年10月開設、面積900㎡・天井高10m。旧東品川清掃作業所を再活用した交流拠点。天王洲アイルの運河沿いに位置し、アート活動やパラスポーツなどの施設利用を通じて地域の賑わいを生み出している。

※掲載作家は一部抜粋(2026年3月3日現在)

青海南ふ頭公園 | AOMI MINAMI PORT PARK

保税エリアを擁し、大型貨物コンテナやガントリークレーンが並ぶ青海コンテナ埠頭に隣接する青海南ふ頭公園は、東京国際クルーズターミナルや対岸の大井コンテナ埠頭など、東京港の国際的な海運を見渡すことのできる公園です。ここでは、作家自ら巨大なボトルのなかで生活し、プライバシーや公共空間の在り方を検証するアブラハム・ボワンシュヴァルのパフォーマンス作品《La Bouteille》(2015-)や、東京藝術大学小沢剛研究室によるヤギの飼育を通して、持続可能な創作や研究、表現の場を探求する《ヤギの目》(2020-)といったプロジェクトを予定しています。東京という国際都市の水辺で、アーティストや参加者たち相互の対話や、人間のみならず動物や植物との共存から、オルタナティブな社会実践やこれからのコミュニティの在り方を思索するキャンプサイト、あるいはヴィレッジのような場をイメージしています。

アブラハム・ボワンシュヴァル | Abraham POINCHEVAL

1972年アランソン(フランス)生まれ、マルセイユ(フランス)在住。ボワンシュヴァルは飽くなき探検家である。彼の探検は自身の身体との関わりによって遂行され、このとき作り出される居住可能な彫刻は、時間の経過や不動の状況などについて考察する実験室であり、アーティストを受け入れる容器でもある。そしてそれは風景を異化し鑑賞者が目撃する物語を実在化するオブジェとして機能する。

近年の主な展覧会やパフォーマンスに、パリオリンピックに合わせてサン＝ドニ運河に巨大なボトルを浮かべ、そこで10日間生活した《La Bouteille》(パリ、フランス、2024)をはじめ、「La Collection, Rendez-vous avec le sport」(Fondation Louis Vuitton、パリ、フランス、2024)、「バンコク・アート・ビエンナーレ 2024」(バンコク、タイ、2024)などがある。

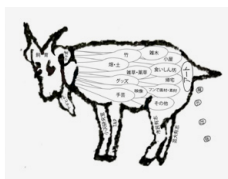


作品 | 《La Bouteille》2024, Paris, France
Photo by Hafid Lhachmi / ADAGP Paris
2024. Courtesy of Semiose
ポートレート | Photo by Jean-Christophe Lett

ヤギの目 | GOAT'S EYES

2020年発足。東京藝術大学先端芸術表現科の小沢剛研究室を中心とした学生、教員、地域住民有志、取手アートプロジェクトがヤギの飼育をプラットフォームとしてつながり、壁も屋根もないアーツセンターとして活動。多様なメンバーがヤギと共に日々の営みを通じて、現代社会における持続可能な表現、次世代のコミュニティのあり方も模索している。

主な展覧会に「ラーニング／シェアリングー 共有から未来は開くか?」(鳥取県立博物館、鳥取、2023)、第一回および第二回「ヤギの目ビエンナーレ」(共に、たいけん美じゅつ場VIVA、茨城、2021および2023)がある。また、これまでの活動記録をまとめた書籍『ヤギの目記録採取帳 2020-2023』(2023)を発行している。



作品 | 《ヤギの目》
ポートレート | 《ヤギの目》概念図



青海南ふ頭公園

1997年4月1日開園、面積43,760.40㎡。臨海副都心地区の南端に位置し、青海コンテナ埠頭に隣接するL字の形をした公園である。船や飛行機、大きなコンテナ埠頭の風景とともに開放的な景色が広がる。

※掲載作家は一部抜粋(2026年3月3日現在)

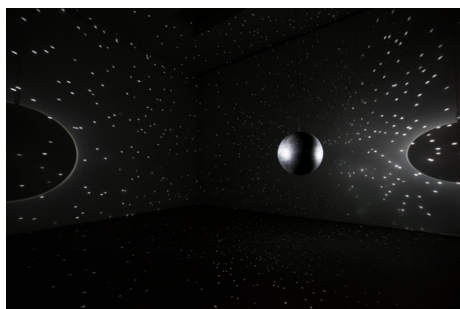
地下駐車場(青海南ふ頭公園内) | UNDERGROUND PARKING LOT (WITHIN AOMI MINAMI PORT PARK)

青海南ふ頭公園には、全長197.5mの地下空間が広がっています。今回の企画に際し、現在は利用を休止しているこの場所が特別に展示会場の一つとして開放されます。地上の展示と対をなすような、また、通常は足を踏み入れることの出来ないこの地下空間の特性を活かした展示を構想中です。

ケイティ・パターソン | Katie PATERSON

1981年グラスゴー(スコットランド)生まれ、スコットランド在住。地球の歴史、地質学的な時間、自然とのつながり、月や星、宇宙との距離など、存在の起源と人類の関係性に端を発した壮大で抽象的な概念に詩的にアプローチし、フィジカルな体験へと変える作品を発表している。世界各地で発表される作品には、研究機関や研究者、小説家など、さまざまな分野の専門家との協働プロジェクトも多数ある。

近年の主な展覧会やプロジェクトに、「FROM AMBER TO THE STARS」(Mikalojus Konstantinas Čiurlionis National Art Museum、カウナス、リトアニア、2025)、個展「—there lay the Days between—」(MIT List Visual Arts Center、マサチューセッツ、米国、2024)、ソロプロジェクト「Future Library」(100 Year Commission、オスロ、ノルウェー、2014–2114)などがある。

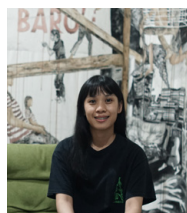


作品 | 《Totality》2016
Photo © Julie Lovens, 2016
Courtesy of Kunsthaus Pasquart, Biel
ポートレート | © James Bennet

イベ・ヌル | Ipeh NUR

1993年ジョグジャカルタ(インドネシア)生まれ、同地在住。ヌルの作品は、個人的な経験、日常生活における問題、記憶、レジリエンス、そして背景となる歴史的出来事を基盤としている。演劇的なヴィジュアルから着想を得て、主にドローイングを中心に制作しているが、パティック(ろうけつ染め)、陶芸、版画、彫刻、インスタレーション、映像、壁画など、多様なメディウムや技法も用いている。近年は海にまつわる文化、知識の継承、古代神話に言及する作品を発表している。

近年の主な展覧会に「Setelah Padam」(Kedai Kebun Forum、ジョグジャカルタ、インドネシア、2025)、「Sharjah Biennial 16」(シャルジャ酋長国、アラブ首長国連邦、2025)、「Constellations」(47 Canal、ニューヨーク、米国、2025)、「Small World Cinema」(SculptureCenter、ニューヨーク、米国、2024)、個展「Menghanyut: Tubuh dan Perjalanan」(Soboman 219 Art Space、ジョグジャカルタ、インドネシア、2022)などがある。



作品 | 《Ombak Belum Tidur》2024
Photo by Ela Bialkowska, OKNO Studio for
PinchukArtCentre/Future Generation
Art Prize 2024
ポートレート | Photo by the artist and ara
contemporary



地下駐車場(青海南ふ頭公園内)
1997年4月利用開始、面積7,603.75㎡、216台収容可能な駐車施設。現在は利用を休止している全長197.5mの地下空間が、期間限定で美術展会場となる。

※掲載作家は一部抜粋(2026年3月3日現在)

4 関連プログラム

新進気鋭の才能の発見、アート界の活性化、学びの機会拡充などを目指し、本美術展ではさまざまな特別展示を開催します。若手特別展示をはじめ、展示内容は今後、随時公表予定です。

若手特別展示の開催

会期中、WHAT MUSEUMにおいて若手アーティスト・若手人材による特別展を開催します。

国内外の若手アーティストへ幅広いジャンルの活動や実験的な試みを支援し、継続的に育成してきたトーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)の運営や、アートマネジメント人材の育成プログラムを展開するなど、長年にわたる次世代人材の育成実績を持つ(公財)東京都歴史文化財団が中心となり、天王洲の街と連携しながら新しい才能が活躍する場を創出していきます。



WHAT MUSEUM

2020年12月設立、面積1,300㎡。寺田倉庫が運営する、倉庫空間を現代アートや建築、さまざまな表現との出会いの場へ昇華させた倉庫会社ならではのミュージアム。天王洲のアートコミュニティの核となり芸術文化を世界へ発信している。

5 開催概要

名称

日本語：国際美術展 TOKYO ATLAS(読み方：コクサイビジュツテントウキョウ アトラス)

英語：TOKYO ATLAS International Art Exhibition

会期

2026年10月10日(土)ー12月20日(日) [72日間]

会場 ※一部を除き、入場無料予定

[台場エリア] 台場公園、お台場海浜公園

[青海エリア] 青海南ふ頭公園、地下駐車場(青海南ふ頭公園内)、テレコムセンタービル

[天王洲エリア] アイルシながわ、WHAT MUSEUM

主催

東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団

アーティスティック・ディレクター

建畠 哲、三木あき子

公式ホームページ

<https://tokyoatlas.jp/>

※現在はティザーサイトを公開中。2026年6月下旬に本サイトへ移行予定。URLは変更ありません。

協賛一覧(2026年3月3日時点)

寺田倉庫株式会社、株式会社東京テレポートセンター、株式会社みずほ銀行



MIZUHO みずほ銀行

これまでのプレスリリース

1. 2026年、東京都が新たな文化芸術祭を始動 | 2025年7月 | 都庁総合ホームページ
2. 東京都 国際文化芸術祭 開催発表 | 2025年9月 | 都庁総合ホームページ
3. 国際美術展「TOKYO ATLAS」プレスリリース | 2025年12月 | ティザーサイト



1



2



3

報道関係のお問合せ先

国際美術展「TOKYO ATLAS」広報事務局

西山(Nishiyama): info@yna.tokyo

嘉村(Kamura): press@tokyoatlas.jp

オフィシャル素材ダウンロード先

https://drive.google.com/drive/folders/1iu0AqYWT9fwYj-_KUq1LQTPa1Y6J1Yo9?usp=drive_link

